



175号

2012/7/1

日中文化交流市民サークル'わんりい'

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆'わんりい' HPのアドレスが上記になりました。



乗せてくれて、写真も撮らせてくれた親子(四川省小金県) 2012年6月 佐々木健之

'わんりい' 175号の主な目次

北京雑感 (66)公園の池	2
私の調べた諺・慣用語11「牛に対して箒を弾す」.....	3
媛媛讲故事 (45)「寶娥の冤罪IV」.....	4
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より.....	5
中国一城市めぐり(番外)「何日君回来物語」を読んで.....	6
アジアの映画鑑賞 (2)「道一白磁の人」.....	9
「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて①丹巴へ ...	10
山西省あちらこちら(番外)五台山・台懐鎮	12
アフリカの日々 (64)「世界を変えるのが私の夢」 ...	14
スリランカ紹介 (59)「スリランカ濃厚ヨーグルト」...	15
読む (86)「ミラクル」	16
私の四川省一人旅56	17
ドラマティックな「米色青磁」の陶磁器	20
'わんりい' 掲示板	21・22

【表紙写真説明】

早朝の散歩で、宿から支流に沿った道を3キロ程遡ると二俣となった。ここまで来る間にオートバイや、騎乗の村人に抜かれた。もっと上流には放牧地があるらしく、牛を追いながら登ってくる人もいる。そろそろ宿に戻らないと朝食時間に遅れそうだ。回れ右で来た道を引き返すと、背後から車の気配。やり過ごそうと路端に避ければ、小型車が止まり、なにやら話しかけてくる。これは乗れということか? 「くーいーま? (いいですか?)」と、ドアに手をかけてつたない中国語で問うと「可以(いいよ)」の返事。ありがたく乗せてもらう。

運転席には壮年の男、助手席には女の子を抱いた若いお父さん。1時間以上歩いた道もあっという間に宿近くまで来た。車を降りるとき20元札を差し出したが爽やかな笑顔で断られてしまった。下車して首から下げた自分のカメラを指さし、「くーいーま?」と聞くと、ポーズを取ってくれた。
(佐々木)

随分(6、7年)前に、日本のメディアでも、北京の水不足に関する話題が報道されました。中国政府は、「南水北調」と言って、南方の水を北京へ送る政策を策定・施工しました。一時期、その南からの水がかなり汚染された水で、「そんなものを北に送っても、汚染が広がるだけだ」との批判が報道されましたが、これに対する対策も取られたのでしょうか、その後はあまり話題になりませんでした。不勉強で、この問題をどのように解決したのか知りませんが、「南水北調」政策は現在も続行されています。

その結果かどうか、現在、生活用水の不足は小康状態のようですが、当時も北京市内に住む限り、断水などはほとんどありませんでした。それどころか、市内では道路の清掃や、街路樹・中央分離帯・公園の花壇等への水遣りに散水車が出て、太いホースから水をダボダボと流しているの、水不足なのにもったいない、草花にも遣り過ぎて悪影響を与えるのでは、と心配したものでしたが、これはとんだ見当違いでした。使用している水は、中水と言って、下水を処理した水で、不足している上水とは別のものでした。また、北京の土は赤土で、日本の土のような保水力が無いので、水遣りの時は、これでもかと言わんばかりにたっぷりやらなければいけないのだそうです。

北京の上水は、もともと供水量とともに、水質にも問題を抱えていました。北京へ出かける人は皆一緒に、「生水は飲まないように」と注意を受けますが、北京の人々も決して生水は飲みません。家庭や職場では、一度薬缶で沸騰させたお湯[湯冷ましも含めて开水(kaishui—カイシュイ)と言います]をポットに入れて、飲用水として使っていました。このポットが優れたもので、直径15cm、高さ40cm程のものが一般的で、長く使い込んで一見草臥れているようなものが多いのですが、どんなに古臭く見えても、保温力は抜群で、朝入れれば夕方まで十分に熱湯と言える温度を保ちます。私の個人的印象では、魔法瓶に関しては、中国製品が日本のものより優れているような気がします。

北京の家庭の薬缶やポットの底に、白い沈殿物が溜まっているのをよく見かけました。水を浄化する時の薬品が火を通した時に凝固してできる物質だそうで、その都度きれいに流せば良いのですが、北京の人々はあまり気にしないで、その上から水を足して沸かし、上澄みを使うので、薬缶やポットの底に残ってしまい、こびりついてしまうことが多いのです。こんなのを見

ると、毒ではないと言っても、やはり北京の水道水をそのまま飲む気には到底なれませんでした。

そんな状況でしたから、北京の各家庭に給水器が普及するのは瞬く間でした。最近、日本でも熱湯と冷水それぞれのコックが付いた給水器を置くお宅が増えたと聞きますけれど、北京では6、7年前からこの給水器が一般家庭で利用されるようになり、自転車が曳くりヤカーに水桶を積んで、家庭に配達する様子が見られるようになりました。この給水器の普及に関しては、北京は日本より少なくとも5年は先行したと思います。これは、電話がまだ少なかったところへ、携帯電話が導入されて爆発的に普及したのと同様の現象で、不便だった所へ便利なものが紹介されたので、人々が大歓迎で受け入れた結果でしょう。

それほど水に不便を強いられる北京ですから、水の絶対量が不足しているのかと思ったのですが、実際のところ、北京の水は意外に豊富でした。北京の公園の多くには、大きな池があります。公園の池と言っても、日本庭園の池とは大違い、上野公園の不忍池クラスは小さい方で、中国語では公園の池を「湖(hu—フ)」と呼ぶことが多いのですが、日本語の「湖」を連想しても納得してしまう大きさです。

故宮へ行くと、眼前に本当に湖のような「北海」が広がり、その大きさにびっくりします。南に続く中南海はご存じの通り、政府要人の居住地域なので、遠望するだけです。北の方には前海・後海・西海と続いて、昔の運河につながります。今でも観光に利用されている運河は、玉淵潭公園の八一湖から頤和園の昆明湖まで船が運行されています。運河の支流には紫竹院公園があり、そこにも大きな紫竹院湖があって、隣の動物園と船で結ばれています。市内の水路を辿ると、北京市もちょっと違った顔を見せてくれますから、一度は運河の船旅を経験されるのも良いのではないのでしょうか。

北京西駅の近くには蓮花池公園があり、蓮の花の季節に早朝、対岸から見ると、北京西駅独特の屋根が霽にかすんで見える程大きな蓮花池があります。市の南部には陶然亭公園があり、ここも中心に大きな池があります。北京で公園と名が付き、池が無いのは天壇公園くらいしか思いつきません。

前々からの印象で私は、「北京は乾燥した街」と思っていました。公園の池の畔で水面を眺めていると、本当は「水の都北京」なのではないかと考えてしまいます。

私の調べた諺・慣用句 11
牛に対して箏を弾ず

三澤 統

「彼にいろいろ教訓めいた話を聞かせて論しても、どうせ“馬の耳に念仏”で分かってもらえないと思うよ」。

時々こういう言葉を耳にします。世の中には価値あるものの有難さが分からない人が多いようで、その関連の慣用句が沢山見受けられます。曰く、「猫に小判」「豚に真珠」「牛に対して琴を弾ず」「犬に論語」「牛に経文」等々枚挙にいとまがありません。それらの中から今回は「牛に対して琴を弾ず」をとりあげて調べてみました。

辞書には次のようにあります。

- ▲小学館 デジタル大辞泉：「牛に対して琴を弾ず(中国、魯の公明儀が牛の前で琴を弾じ、名曲を聞かせたが、牛は知らぬ顔で草を食べていたという、祖庭事苑^注)にある故事から) 志の低い者や愚かな者に高尚な道理を説いてもわからないことのたとえ。牛に琴を聞かすよう」
- ▲小学館 中日辞典：「对牛弹琴 (duì niú tán qín) 道理をわきまえない人に道理を説くたとえ。馬の耳に念仏」

中国の古代、魯の国に名を公明儀という著名な音楽家が居ました。彼は音楽について非常に高い造詣を有し、さまざまな種類の楽器にも精通し演奏も又見事でしたが、なかでも琴の演奏が大変得意でした。かれの演奏する優美な琴の音は、聴く人をその曲の世界に誘い、演奏が終わっても、その素晴らしい余韻は、三日間も耳を離れないほどでした。

ある春の日の午後のこと、その日は見渡す限りの晴れた空で、穏やかな風が吹き、日は麗らかでした。公明儀が郊外を散歩していると、青くつやつやした草地で一頭の牛が、丁度頭を地面に下げて草を食べているところでした。そんな澄み切った環境の中で彼はふつつつと

演奏家としての気力が漲ってきましたので、この牛に一曲聴かせてやろうと思いました。

彼は先ず大変高尚な曲である「清角之操」を演奏しました。真剣に心をこめて演奏する琴の音は大変すばらしかったにもかかわらず、その牛は相変わらず、前のままだ頭を下げて草を食べているだけでした。

そもそも牛には、この悠揚せまらざる素晴らしい曲や、今正に演奏をしている大音楽家の公明儀のことも根っから理解できません。

公明儀は、牛が少しも彼の演奏に耳を貸さないことに、大いに立腹しました。

しかし、冷静になって牛を観察した結果、牛は琴の音が聞こえていないのではなく、牛の鑑賞力は知れたもので、このような高尚な曲調の「清角之操」は味わうことができないのだということにやっと気付きました。

そのことが分かった公明儀はあらためて通俗的な曲を弾きました。すると牛は琴の音が、蚊やハエの飛ぶ音や、子牛の鳴き声のように聞こえたので、草を食べるのをやめて、耳をそばだて、一生懸命に聴いているようでした。公明儀はそれを見てやっと機嫌を直しました。

〈注記〉

祖庭事苑：中国の字典。8巻。宋の睦庵善卿撰。1098～1110年刊。「雲門録」などの禅宗関係の図書から熟語二千四百余語を採録し、その典拠を示して注釈を加えたもの。(デジタル大辞泉より)



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

実は、15年前、端雲を蔡婆に預けて都に上り科挙の試験を受けた寶天章は優秀な成績で科挙の試験に合格しました。そして、朝廷に任用されて出世することができましたので、10年ほど前、故郷に残した自分の娘・端雲に会いたいとかつて住んでいたところへ帰って見ましたが、蔡婆の家族も端雲も既にそこにはいませんでした。知り合いの人から、「戦乱が起って蔡婆は端雲を連れてどこかへ逃げて行った」と聞き、悲しみながらも蔡婆と端雲のことに気に掛けて過ごして来ました。

寶天章は朝廷に任命され山陽に来ると、直ちに大きな机の前に座り込んで、夜を日に継いで仕事に没頭し、山のように積みあがった裁判の資料を調べ始めました。

まずは、裁判に掛けられた事件の種類によって資料を分類しようとして整理を始めました。と、その時、表紙に「寶娥毒殺案」と書かれた書類が寶天章の目を引きました。老人を毒殺したという罪は重罪です。而も犯人は自分の苗字と同じではありませんか。

いささか皮肉のような感じを受けた寶天章はその事件について後でゆっくり調べようと思い、事件の調書を机の上の、手元からやや遠い位置に置き再び他の文書を手に取ろうとしました。

すると、どこからか一陣の風が吹いて来て蠟燭の炎が風でゆらめき消えそうになりました。寶天章は慌てて、両手で蠟燭の炎を覆い、火の炎が落ち着くのを待って椅子に座り直しました。と、どうしたことでしょう。先程、机の奥に置いた「寶娥毒殺案」の文書が目の前に戻ってきているではありませんか？

「あれ？私が思い違いをしたのか」と不思議に思いながら、その調書を手元に積み上げた書類の一番下に押し込んで、他の事件についての調書を読み始めました。

ところが、また、どこからか一陣の風が吹いて来て、窓が開きました。寶天章は椅子から立ち上がると窓をしっかりと閉めて机の前に戻りました。不思議なことに、「寶娥毒殺案」の調書が今度は「目の前に

積み上げられた調書の一番上にあるではありませんか！寶天章は、奇妙な感じを受けると共にはっと予感のようなものを感じ、「もしかしたら何かあるのかも？」とその調書を開いて読み始めました。

「……犯人は寶娥、19歳……。ああ、娘の端雲も、今年は19歳になっているはずだなぁ。うむ、姑は蔡といい……。え？昔、娘を預けたおばあさんも蔡という苗字ではなかったか？」

寶天章の胸がどきどきと強く鼓動し始めました。

「原告は張といい、寶娥の夫。寶娥が舅を毒殺した…」

寶天章は丁寧に最後まで読み続けて行きました。

「殺人の動機はなんだ？毒薬をどこで手に入れたのか？なんでこんな大事なことが記録されていないのか？」

「事件が起きてから処刑までの時間も短かすぎる。どうも不自然だ…」

寶天章は調書を読むうちに色々な疑問が湧いてきました。そして静かに目を閉じて事件をいろいろ深く分析しているうちに、臉が重くなりいつの間にかうとうとし始めました。

すると、寶天章の前に端雲の成長した姿がうっすらと現れ、彼女は泣きながら、彼に向かって歩いて来ます。

「お父さん、私は娘の端雲です。故郷で戦争が始まったので蔡婆さんに連れられてあちこち逃げた後、この山陽に来ました。私の名前も寶娥と変わりました。舅を毒殺したなどという事はまったくのでたらめです！お父さん、娘の冤罪をどうか雪いでください！お願いします！」

娘が泣きながら訴えるのを聞き、寶天章も誘われて涙をぽろぽろ流しながら娘の手を取ろうとすると、娘はふわふわと浮き上がりどこかへ消えてしまいました。胸に強い痛みを感じて、寶天章は目が覚めました。

「今は夢か。けれど、娘が話したことをはっきり覚えている。娘はこの父に何かを伝えたいと思って

現れたのかも…」

竇天章は、はたと気がつきました。

翌日を待たず、竇天章は、この事件について再調査を始めました。まずは蔡婆を呼びました。そして蔡婆の顔を見るや、その昔、自分が科挙の試験を受けるために端雲を「童養嫁」^注として嫁がせた家の姑だと分かりました。二人は再会を喜びながらも悲しみも又深く、二人の胸の内は複雑な気持ちでいっぱいでした。

蔡婆から色々詳しい話を聞き、町の人々からも様々な証言を得て、事件のいきさつがだんだん明らかになってきました。

蔡婆は無頼漢の父親とは結婚しておらず、竇娥もその息子と結婚してはいないのです。ですから「舅」を毒殺する”の案は成立しません。そして、無頼漢に脅されて毒薬を調合した賽も捕えられました。

再審理は、毎日公の場で行われ、その間、囚人服をまとった竇娥をあちこちで見かけたという噂が町中に流れました。再審理の結果、事件の全ての事実

が白日の下にさらされ、竇天章は公正な法律に基づいて竇娥の冤罪を明らかにしました。その結果、役所の長官は汚職罪で免職となり、無頼漢は自分の父を毒殺した張本人として死刑に処されました。また、毒薬を配合した賽は殺人に関与したとして板叩きの刑罰を受けた後、辺境での兵役に服しました。

全てが終わると、蔡婆は「私を守ってくれた嫁よ！安心しておくれ。お父様がお前さまの冤罪を晴らしてくれましたよ」と言って胸が裂けんばかりに泣きました。竇天章の感慨も言葉では表せないほど深く、熱い涙が両目を潤しました。

その後、「竇娥の冤罪」の物語は、巷で語られ伝えられるようになりました。 （この項終わり）

● 注釈

童養嫁：中国に古くから伝わる習わしの一つ。将来息子の嫁にするため、女の子を子供の時から、金品と引き換えに引き取り、息子の面倒を見させたり、家事の手伝いをさせたりして、二人が成人してから挙式を行う。

松本杏花さんの俳句

「千里同風」より

新茶噛む一針二葉は紅の色

xīn chá kǒuzhōng jiāo/jiào/jué
新茶口中嚼
iān yá rú zhēn bàn liǎng yè
尖芽如针伴两叶
yīn hóng sè rú xiě/xuè
殷红色如血



季语：新茶，夏。这一点与我国不同。我国一般将新茶作为春季的鲜物。

赏析：本首俳句描写了作者在武威山见到大红袍茶的新芽时惊奇的心态。一针二叶指新茶的芽尖、是最鲜嫩的地方、一般视为茶中精粹。作者在山上见到茶树新芽、想不到竟呈红色、故放在口中咀嚼、品尝着原生态的天赐佳品。作品既有物象描写，又有内心抒情、浑然一体、难能可贵。

崖下の小流れに添う梅雨の傘

méiyǔ xì miánmián
梅雨细绵绵
yá xià xiǎo xīliú chánchán
崖下小溪流潺潺
yòu tiān wǔsè sǎn
又添五色伞

季语：梅雨，夏。

赏析：梅雨季节本来就满目青绿、天地湿润，再加上身处崖下小溪流、更显出一片水彩画般的情景来。最有点缀性的、倒是那伞色的五彩缤纷、给冷色调的青碧画面带来夺目的暖色调、形成一种视觉上的冲击力。这类题材、对于擅长捉捕大自然之美的作者来说、正好表现出其拿手好戏。

皆さんは、「周璇」「黎莉莉」や「黎錦光」「劉雪庵」という中国人をご存知だろうか。四人とも1930年代の上海——あの租界時代の混沌とした上海でキラ星のごとく輝いた星たちである。四人の中では黎錦光が「夜来香」を作曲した人だということだけ知っていたが、その生いたちやどのような活躍をした人なのかは知らない。残りの三人は全く知らなかった。始めの二人は歌手であり女優であって、後の二人は作曲家である。

昨年末(2011年末)、友人が「この本を読んだことあるか?」と言って「何日君再来物語」という単行本を私の目の前に置いた。カラフルな表紙には、五人の女性の顔写真が印刷されていた。彼女たちは、「周璇」「黎莉莉」「山口淑子(李香蘭)」「渡辺はま子」「テレサ・テン(鄧麗君)」である。五人に共通しているのは、いずれも中国の名曲「何日君再来」を歌って一世を風靡したことである。顔立ちは皆違って特徴があるが、彼女たちは皆美しい。その本の題名と表紙を飾る顔を見て、若い頃のいくつかの思い出がよみがえり、懐かしさを覚え早速借りて一気に読み通した。著者は中藪英助という人であるが、この人も私は知らなかった。

今年に入って町田市の文学館に行ったとき、偶然にも「中藪英助展」のパンフレットが目に入った。見ると神奈川近代文学館で没後10年を記念する形で展覧会が3月上旬から開かれると出ている。さっそくパンフレット片手に出掛けた。中に入るとかなり広いスペースで展示してある。貼りつけてある彼の年譜を見ると1920年に福岡県の北九州市で生まれている。

青年期を中国・北京で過ごしている。1946年(昭和21年)、26歳の時、日本に引き揚げ東京での生活が始まった。多くの作品を書き、昭和44年には「北京飯店旧館にて」で読売文学賞を受賞したりしている。展示コーナーを順に廻っていると「何日君再来物語」のコーナーが作ってあった。

そこには何種類かのこの曲のカセットテープや長い間不明であった作曲家や作詞家を調査するため、友達に

出した手紙なども置かれていた。この本を書くに当たっての彼の熱意が感じられた。そして2002年に81歳で亡くなっている。第二次世界大戦をはさみながら多くの国々の作家と交流し、幅広い活動の足跡をみると、うらやましくなる程の充実した一生を送った人であった。

私がこの歌に出会ったのは、今からもう30年余り昔だったと思うが、上司に連れられて、とあるバーにおいてであった。その店のママさんらしい50歳台と思われる中国人女性が興に乗ったのか、「何日君再来」を歌い始めたのである。もちろん中国語は分からなかったが耳に心地よく響いた。

中国の歌は独特の抑揚のものばかりと思っていたので、こんなに美しい歌もあるのかと“目からうろこ”の思いで聞き入った。それからしばらく時は流れたが、以前在籍していた会社の同期入社20周年だかの記念旅行で台湾に行った時、台北でテレサ・テンのCDを購入してこの曲と再会したのである。

その時に私は中国の歌は日本語の歌詞で歌うと作詞者の意図と違ってくるのではと思った。今から思えば、できることなら中国語で歌えるようになりたいと思ったのが中国語を勉強する一つのきっかけになったと思う。また漢詩について、上の文字から順に読まねば、韻や平仄のよさが伝わってこないため、漢詩も中国語の発音で読むことができればと若い頃から思ったこともある。余談ながらわんりい主催の「漢詩の会」が毎月開催されているが、植田先生の名講義にとっても満足している。

さて「何日君再来物語」は、時代を超え、国を超えて歌い継がれている名曲を、

①一体誰が作詞し、誰が作曲したのか。

②いかなる状況下で作られたのか。

③さまざまな偏見で見られたのはなぜか。

を著者が8年間も追いつけていくドキュメントである。これから何人かの人物を紹介しつつ筆を進めていきたい。まず周璇(チョウ・シュエン)について述べてみたい。



璇という字は「美しい珠玉」と辞書に出ている。美貌に相応しいよい名前であるが、彼女は1918年に貧しい家庭に生まれ、口減らしのためか両親から見捨てられ、オムツにくるまったまま周家に引き取られて養女となった。名前は小紅(シャオホン)と名づけられた。12歳の頃、芸能プロダクションのような会社に入って歌や舞踊に励んだ。天賦の才があったらしく歌舞の上達はめざましかった。

彼女は愛国歌謡の「民族之光」が好きでよく歌ったが、その歌詞に「敵の奴らを戦場で周旋しようではないか」という文句があった。「周旋」を辞書で引くと、「敵と渡り合う」「応対する」と出ているが、彼女の名字が周ということもあり周旋と名付けられた。そしてさらに映画界に入って「旋」の字を発音も同じ「璇」に改めたところの本に書かれている。

ところでこの本を貸してくれた友人が、以前に中国の歌手のカセットテープをいくつかくれたことを思い出し、抽出の奥をかきまわしてみると、何と中蘭英助展に展示してあったものと同じテープが出てきた。いただいた時はあまり気にとめることもなく、すっかり忘れていたのだ。さっそく聞いてみた。

このテープには「何日君再来」はなかったが、彼女の有名な歌として本にも紹介されている「天涯歌女」と「四季歌」が入っていた。スイッチを押すと美しい声の流れ出て来た。これが当時の庶民が口にした大流行した歌かとじっくり耳を傾けた。しかし、私には、これらの曲もいかにも中国らしい抑揚の歌としか聞こえて来ない。声はとても美しいが、曲は日本人には馴染めないのだろうと感じた。とはいえ、歴史的な歌を聞くことができ、タイムスリップした気分させてもらったのはとても嬉しいことで改めて友人に感謝した。

彼女の声は「金嗓子(ジンサンズ)」——つまり彼女のノドは金の笛だ、と最大級の賛辞が贈られている。日本でいえばさしずめ美空ひばりといえようか。声量は美空ひばりにかなわないが、高音部の澄みきった美しい声は人の心を揺さぶるものがある。友人でもあった山口淑子(李香蘭)は昔をしのびつつ、インタビューで「彼女はナンバーワンの人気スターでした。しかし大歌手とか大女優ぶったりせず、純情で優しい素直な人でした。何日君再来だけでなく、いろんな歌を歌っていました。コブシのきく、ちょっと民謡風の歌がお上手でした。」と回想している(李香蘭については「長春市」[わんりい 172号]を参照ください)。



周璇は、大スターだったが日中戦争から第二次世界大戦へと激動の時代の波に翻弄されつつ、1957年、39歳という若さで病没した。彼女たちの生きた1930年代の上海は魔都と呼ばれていた。三合会などの地下組織による賭博、麻薬、売春などが平然と行われたり、租界を形づくった各国や蒋介石直属の秘密工作員の横行などまさに魔都であった。そうした状況下で1930年代は、上海映画の黄金時代でもあった。

シナリオ作家、監督、作曲家、俳優など各分野で有能な人材を輩出し、多くの映画スターを生み出した。一方で1931年には、中国・東北地方で満州事変が勃発、1937年に日中戦争が始まり、中国民衆の「抗日」は日に日に強まっていくのである。「何日君再来」は当初は愛し合う男女の別離の悲しみと再会の希望を歌ったものと思われていたようだが、映画には1937年に制作された抗日映画「三星伴月」に初めて取り入れられた。従ってこの歌は抗日の歌となった。歌ったのは主演女優の周璇であった。

そして1939年に制作された映画「孤島天堂」では黎莉莉がやはり抗日歌として歌った。彼女は「反攻を期して上海から離れる愛国青年の背中に向けて、今宵別れてのちいつの日君また帰るといふ気持ちで心を込めて歌った」と述懐している。「君」とは重慶に逃れた蒋介石にまた戻ってくれとの思いが込められているともささやかれていたようだ。この名曲は1938～39年に大流行したが、これらの映画の力に与ったものと思われる。上海のダンスホールでは必ずこの曲が演奏されたという。

その後、第二次世界大戦も終わり、時は流れた。文化大革命(1966～1976年)が大きな影響を与えたのであろうが、1980年にはなんと亡国の歌と新聞に書かれたのだ。そして1982年には中国の文化省により「何

日君再来」は黄色歌曲、つまり好色的歌謡——と発表された。時代の変遷とはいえ、「抗日の歌」が「亡国の歌」「黄色歌曲」とまで言われたのだ。作曲家の無念の気持ちは察するに余りある。なお、黎錦光が作曲した「夜来香」も同様に黄色歌曲のレッテルを貼られた。この2曲が黄色歌曲ならば近年の日本の歌のほとんどは黄色歌曲ではなかろうか。

そろそろまとめに入りたい。中藺の執念ともいえる調査でついに全貌が明らかとなった。この曲は、冒頭に掲げた4人の1人である劉雪庵が1936年、上海国立音楽専科学校在学中に、卒業する第4期生の送別パーティを校内で開くことになった際、作曲科の卒業生であった彼が即興的にタンゴのダンス曲を創作したものである。これが「何日君再来」の原曲で、歌詞はまだつけられていないが出席者一同の大好評を得たようである。原曲のタンゴ曲は聞いたことがないので是非聞いてみたいものだ。

その後、この曲を聞きつけた、ある映画監督が本人には事後承諾の形で主題曲に取り入れた映画が前述の「三星伴月」なのである。そしてこの時、黄嘉謨という人が詞をつけたのである。この時作曲は「晏如」とし、作詞は「貝林」というペンネームで世に出されたため、この名曲を霧がかかった状態にさせたように思われる。劉雪庵は、歌詞が卑俗すぎる部分があるとして不満だったようだが、すでに映画が出来上がっていて音楽学校を出たばかりの彼に反対が出来なかったらしい。このあたりはついに面会できた劉雪庵の息子の劉学蘇からの話である。中藺は劉雪庵に会うことは適わなかった。

本稿の最後に劉雪庵の生涯をみてみたい。彼は四川省銅梁県(今は重慶市に編入)の生まれで幼少から音楽がとて好きだった。長じて上海に行き「上海国立音楽専科学校」を受験し合格した。若い時から国を愛する気持ちが強く、1932年の偽満州国建国に憤激してピアノ曲「中国組曲」を作曲した。また「長城謡」という詞に曲譜をつけたりした。

「長城謡」は聞いたことはないが、中国の音楽史に残る抗日歌の傑作という。その後求めに応じて映画界に進出。数々の映画音楽を作曲した。中華人民共和国成立後は華東師範大学(上海市)の音楽科主任、中国音楽学院教授など歴任した。比較的順調な人生を歩んできたように見えるが、新国家の成立から文化大革命への大きな時代のうねりの中で、後半生は思いもよらぬ人生となった。それはこの何日君再来という曲が、作詞は別の人間だっ

たにもかかわらず、漢奸歌曲——つまり日本へ協力者が作曲した曲といつの間にか見なされたからである。文化大革命でも渦中におかれ、二十数年間にわたる迫害を受ける中で両眼とも失明するに至った。そして世間から抹殺されるようにして1985年に79歳で死去した。

この本の初版は1988年であるが、劉雪庵が亡くなってまだ間もないころである。この時点ではまだ黄色歌曲のレッテルに対する名誉回復はなされていない時であろう。息子の学蘇によようやく面会でき、多くの事実を問い質したあと、中藺は「(お父さんとこの曲の)名誉のため、本にして人間と芸術を愛する人々に伝えたい」と了解を求めると、彼は「不怕! (恐れない)」と言ったそうだ。当時の置かれた状況が如実に伝わってくるのではないか。文化大革命は多くの有能な人間を死に追いやっているが、ここにも犠牲者がいたのである。

〔追記〕

この〈雑感〉は、ここで終える予定でいた。ところが〈追記〉をどうしても書きたくなった。それは5月18日に開かれた林敏(リン・ミン)さんの「揚琴リサイタル」に関してである。彼女は多くの方がご存知と思うが、南京の生まれで、北京国立中央音楽大学で揚琴と西洋打楽器を修了され、その後中国国内はもとより海外で数々の公演を行われ活躍されている方である。ミュゼ川崎シンフォニーホールで開かれたリサイタルでは、ピアノ、ギター、コントラバスの演奏者と一緒に四人で世界各国の有名な17曲を精力的に演奏された。テンポの速い曲、ゆったりした曲とも感情豊かに演奏されたが、「蘇州夜曲」と「夜来香」は素敵な喉も披露され、甘くせつない歌声で会場を魅了した。

そして17曲目のカルメン幻想曲で締めくくられたのであるが、会場のアンコールの拍手で再度、「何日君再来」を演奏し、歌われたのである。演奏の前に「皆さんとまたどこかでお会いできますようにとの気持ちを込めて歌います」といわれ、会場は林敏さんの言葉とこの名曲にしばし酔いしれたのである。

尚、このリサイタルのプログラムの表題は「但愿人長久」と書かれていた。これは宋の時代の有名な詩人、蘇軾の一句である。林敏さんが冒頭、「昨年(の)東日本大震災では多くの方が被害に遭われました。私は心がとても痛みました。しかし災害を乗り越えて前向きにがんばって欲しい。人々の長寿を願ってこの表題をつけた」との主旨のお話しをされたが、彼女のやさしい心に深く感動したことを付記して本稿を終わりとしたい。

ディープなアジア映画鑑賞 ②

「道 - 白磁の人」

為我井 輝忠

久しぶりに感動的な映画を見ました。この映画はアジアの映画と言うよりは日本映画の範疇に入りますが、そのテーマと主人公に関心があり、取り上げてみました。実は、私は2回も(試写会と一般上映)見てしまいました。しかし、すでに各地で上映されて1カ月ほどもたっていないながら、あまり関心を呼ばず、ほとんどマスコミで取り上げられていないようで、少々残念です。そこで本欄で紹介出来ればと考えました。

戦前の朝鮮で林業開発に生涯をかけ、その傍ら朝鮮白磁の美しさに目覚め、その美を日本の人々に伝えながら、道半ばでかの地で亡くなった浅川巧(1891～1931)の生涯を描いた映画です。彼のことは7、8年前に偶然ある本で知り、さらに今年の3月「浅川巧生誕120年記念浅川伯教・巧兄弟の心と目一朝鮮時代の美」という展覧会を見て、一層興味を覚えた次第です。

ところで、「浅川巧」をご存知でしょうか。彼は山梨県北杜市の出身で、林業技師として朝鮮に渡り、荒廃した朝鮮の山々を緑に戻す使命を抱いた人でした。日韓両国の教科書に載り、民芸運動の柳宗悦に大きな影響を与え、哲学者の安部能成は彼の死を「人類の損失」と記しています。偏見や驕りにとらわれずに朝鮮人と親交を結んだ稀有の人物であり、その墓は現在ソウル郊外の独立運動に携わった人々が眠る忘憂里公園墓地で共にこの国の人々の手で守られています。

監督は高橋伴明(『火火』や『禅ZEN』を制作)、浅川巧を演じたのは吉沢悠で、彼は「JIN-仁-」、「南極大陸」等のテレビドラマや『夕凧の街 桜の国』、『孤高のメス』等の映画に主演した実力派です。もう一人忘れてならないのは韓国側の主演として出ていたペ・スビンです。彼はNHKが放映の韓国ドラマ「トンイ」に出ていたので、ご存知の方も多いでしょう。映画の中で、ペ・スビン(イ・チョンリム役)は職場の同僚として、浅川に朝鮮語を教え、白磁に代表される朝鮮の文化や工芸品の素

晴らしさを手ほどきし、共に山々を緑に戻し、民族の壁を越えた友情を築いていきました。しかし、ある事件をきっかけとして、チョンリムは抗日運動の罪で投獄されてしまい、2人の美しい友情は引き裂かれようとしていた……

2人の友情をはぐくんだ朝鮮の自然や芸術の素晴らしさをこの映画から見る事が出来ます。さらに戦前の朝鮮の人々とその生活振りに共感を覚えたり、同時に当時の日本人の傍若無人な振る舞いに怒りを感じるなど、普通のありきたりの映画を見た時に感じたことのない高揚感を覚えました。これはこの映画の素晴らしさから来るものなのでしょうか。内容としてはかなり重いテーマの映画ですが、今でもその時の感動が何度も蘇ってきます。

この映画の制作が企画されてから10年ほど経つそうです。日韓混成スタッフのため日本と韓国の考えの違いとそこから来る対立等両者を隔てる高い壁があり、徐々に理解しながら、完成にこぎつけました。KOFIC(韓国映画振興委員会)の支援を受ける初めての外国映画にも選定されました。この映画のホームページ(<http://hakuji-nohito.com>)もありますので、さらに興味のある方はご覧になってみてください。



①映画の一場面 ②浅川巧生前の写真 ③ソウルにある浅川巧の墓

「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて① 丹巴へ

佐々木健之



順調だったが、事故渋滞に。少しでも隙間があると後の車が当然のように割り込んでくる。

このたび私は、「わんりい会報」でおなじみの大川健三さんの「四姑娘山・写真だより」の舞台となる村々を訪れる機会に恵まれた。当地四川省のチベット自治区は緑豊かで、ふつう連想するチベットとは違い、降雨量が多い。南に位置しているが標高が高いので貴重な高山植物が多く自生している。しかし中国奥地でも希少植物の盗掘がよくあり、個体数が減っているようだ。高山植物の記載は、たびたびこの地を訪れている、関根茂子氏一行の優れたレポートが過去の「わんりい」にあるので、今回私の投稿は植物ではなく、街角ウオッチャー風にした。

2012年6月10日、成都のホテル前から朝6時過ぎ都市間路線バスにて出発。我々のメンバーは案内の大川さんと、世話役の河本さんを含め11人。大川さんの配慮で座席2人分を1人で座ることができてラクだった。もちろん2人分の料金を払う。地元客も数人後部座席に座り、最前部には民族衣装の母娘が座っていた。その

ほかの座席はわれわれが占めた。

高速道路を快適に飛ばし、茶馬古道のモニュメントの脇を通ると一般道になる。目的地「丹巴」へは成都盆地から山越えの「二郎山トンネル」を抜ける。2004年の暮れに「康定」へ行ってから8年半ぶりの道だ。予定では所要12時間というから運転手もえらい。

しかし「二郎山トンネル」へと続く渓谷沿いの道を登っていくと、停止した車の列に行き当たって止まった。土砂崩れ？ 事故？。予想開通時刻など説明はない。ひたすら開通待ちとなった。しばらくすると下流方向からクレーン車が登ってきたので事故らしい。さらに待つことしばし、やがて事故車を積んだトラックが下ってきた。それから前方の車から順次動き出す。停車時間は約1時間。こうして「二郎山トンネル」を通り抜けた。

トンネルから山道を下ると、長江の支流の岷江のまた支流である「大渡河」の谷底へ一気に下る。枝支流といっ



お世話になった、成都↔丹巴の都市間路線バス



事故車の無残な姿



事故車の相方は、トラックでした。



巨大な橋梁工事もあった。濁流がとうとうと流れる。



やっと二郎山トンネルにまで来ました。



丹巴の街は日曜夕方、踊りの輪で賑わっていた。



「大渡河」溪谷の道は、工事箇所が多くほこりっばい。

でも堂々たる大河だ。谷底に下り着くとこんどは河に沿って上流の「丹巴」へ向かった。

前回来たとき見た大渡河は、ふかみどりの水がとうとうと流れる美しい河であった。しかし今は茶色の泥水が渦巻いて流れている。濁り水である。道路が延びる川岸は行けども行けども土木工事の真っ最中であった。随所にある立て看板によると電源開発のようだ。大渡河に電源開発で階段式にダムをいくつも作るらしい。帰国してネットで調べると、大渡河最上流の計画地点、「独松ダム」は満水位標高2,310m、そして大渡河最下流の既

設ダム「銅街子ダム」の満水位が標高474m、なんと標高差約1,800mだそうだ。具体的な場所はよく分からないが、標高差が大きいのので河が逆巻いて流れ下るわけだ。そして川幅一杯の豊富な流量。電力・水不足の中国が、比較的成都盆地に近いこの河に手を付けるのも分かる。おかげで道路はホコリだらけとデコボコ。建設中の橋梁やトンネル、作業員宿舎などがつぎつぎと現れ、工事の規模は計り知れない。

丹巴に近づくと「公安」の検問があった。われわれ「外国人」はバスを降り、用意された紙に、氏名、パスポート番号を記載した。大川さん曰くこんな事は今までなかったそうだ。10日程前に丹巴からさほど遠くないところで33歳の女性僧侶が、チベット人に対する当局の高圧政策に抗議するため焼身自殺をはかって死亡した。そんなこともあり少し世間が不安定なので、外国人が無用の刺激のきっかけを作ったりするのを恐れているらしい。われわれは能天気な遊山客なので、検問を無事通過し丹巴の街に到着した。

日曜日というせいか街のメインストリートでは、踊りの輪で賑わっていた。一行は1階が市場という変わった建物のホテルにようやく収まった。

(続く)

前号で、丁度10年前になる五台山ハイキングを思い出しながら書いたが、五台山の旅でハイキングを書けば、どうしても紹介したくなるのが台懐鎮の寺巡りや奉納演劇や廟会のことだ。

中国の地方を旅すると、様々な守護神を祀る立派な廟があちこちにあり、必ずと言ってよいほど廟の正面に向かって小さいながら立派な舞台がある。廟の祭祀以外にも、献戯といって守護神に対して演劇などの芸能が奉納されている(或いは、かって奉納されていた)とのことだ。

中国には各地方ごとに特筆できる立派な土着の芸能があつて、それらを鑑賞するのは中国各地を旅する楽しみだった。山西省旅行の折、旅のまとめ役の岩田さんが、楊家村(楊家将の末裔が住むという)の廟前の舞台を使用して晋劇(山西省の地方劇)の上演を旅行社に計らって貰って下さったが、その時は多数の村人たちも出て来て一緒に楽しんだ。舞台の前の賑わいに、テレビも映画もなかった頃、廟の舞台で奉納される芸能は人々の格別の楽しみだったに違いないと想像し、廟の舞台が中国の地方演劇の華やかな開花を促したかもしれないなどと考えた。

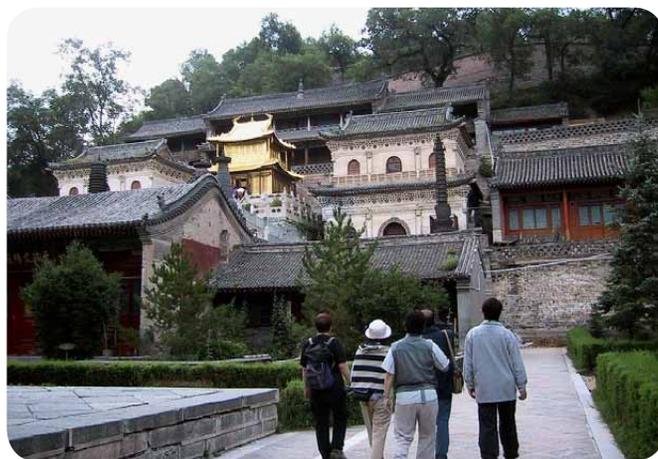
さて、私たちが五台山を訪れた7月、台懐鎮では折から廟会のシーズンで、一日中、晋劇(山西省の地方劇)が奉納されていて連日堪能した。奉納劇が演じられている寺に近づくと、鍛えられた喉で朗々と唱う花臉(英雄役)の音が聞こえて来て、どんな俳優が演じているかとどきどきした。当時の台懐鎮の様子は、その頃会員だった中村文子さんがいきいきと2002年10月号の‘わんりい’に書いてくださっていたので、中村女士の了解を得てそのまま掲載して紹介したい。

(田井光枝)



台懐鎮という地名は、五台山の山懐に抱かれる大きな村という意味です。私達はここのホテルに連泊しました。周りを山に取り囲まれすり鉢の底みたいですが標高にして2000m位の高地で、夏は涼しいけれど冬は雪深さぞかし寒いことでしょう。

そもそも五台山は文殊菩薩ゆかりの聖地として尊ばれたところで、台懐鎮は西暦58年ごろから寺院が建て始められました。歴史的な古寺が嫌になるほど沢山有り、私達もその幾つかを見学しました。その多くは文殊菩薩を主体に祀られているのですが、祀られる文殊菩薩もいろいろ有ってそれぞれ名前が違うので驚きました。また、建築物も〇〇が中国No.1などという重要文化財



◆台懐鎮の寺の中で最大規模の顕通寺に向かう

又は国宝であつたりして、一つ毎に感心していたのですが、最後には頭の中で一塊になってしまいました。仏教に関心のある方が訪れるときっと見ごたえのあるところでしょう。

五台山にはとてもユーモラスな楽しい仏像が多く、菩薩様たちのお顔も少しやり過ぎの厚化粧だったり、お寺の入り口に置かれている布袋様は大きなお腹を突き出して金満笑顔であぐらをかいていて、思わず笑ってしまうと、実はこれ、弥勒菩薩様の化身なのだそうです。また、立派なヒゲの素敵な男性像は観音様の化身とか。こんなに変身されては困ってしまいませんか。なんだか遊ばせて貰っているような気がしないでもない五台山のお寺参りでした。

また、この聖地はラマ教の寺も多く、赤っぽい僧衣を着た若い僧が沢山歩いています。また五体投地をしながらお寺を巡っている巡礼も見かけました。街の中心部は殆ど仏具店と僧衣を売る店で、大きな音で歌謡曲のような音楽テープを流しているのですが、この男女のデュエットが実はお経なのです。ノリのよいメロディーなので口ずさむには丁度よく、私は今回も買ってしまいました。しかし、歌詞をよく読むと観音様の有り難さを説いています。

夏の農作業は暇になり、人々はのんびりと過ごします。私達が五台山台懐鎮を訪れていた頃は10日にわたる大法会の催される時期にあたり、万佛閣という、立派な舞台の備わった、台懐鎮中心部のお寺では献戯(お願いのために奉納する)とか還願戯(お願いが叶ったお礼に奉納する)という意味の劇が奉納されていました。



◆舞台と寺は真正面に向かい合う。寺の正面の階段を上って撮影。雨が降って来ても舞台の熱演に見入る人たち。於：万佛閣



◆旧暦の6月15日、台懐鎮のラマ教の古寺で繰り広げられる廟会。此方ではラマ教の異様な面を被った踊り手たちによって、文殊菩薩の功德が踊り語られているようだ。広い境内が人々で埋め尽くされていた。



それぞれの俳優たちは歌う声もよく訓練されて伸びやかに劇中人物の心情を唱い上げ、芝居の内容はよく分からないながらもストーリーを想像しながら目と耳を十分堪能しました。

私達は折り良くこの時期に巡り合わせ、暇があれば通って沢山の奉納劇を無料で拝見させてもらった訳で幸せでした。東京でこれだけ見たらいくら取られるか等と姑息なことを考えたりして、邪心の多い私には文殊様のお知恵の片鱗さえも授からないことでしょう。(2002年7月)

【余話】 五台山・台懐鎮の街を歩いていると沢山の修行僧たちに出会う。まだ、修行の結果が表れていない修行僧たちの姿は正にそのまま生きた五百羅漢達といった風情だ。と、私たちが土産物屋から炎天下の表通りに出た時、涼やかなシースルーの墨染めの衣を着た一人の若い僧侶が、竹製の編み笠を被り通りを横切ってきた。姿も足取りも爽やかで、熟年女性の我々同思わずはっと息を止めて見送った。残念ながら傘の内のご尊顔は拝めなかったが、背筋の伸びた姿の美しさに見とれ、そのベトナムの農民が被るような、先のとがった竹製編み笠を土産物屋で見つけると皆で買って持ち帰った。

中村女士は、今も洗濯物を干しに庭に出るときに使っているそうだ。私は山歩きで得意になって被っていたが、或る時、一陣の風が吹いて三角の傘の部分が林間に飛んで行った。傘の台だけが頭に残って皆で大笑いしたが、幸い仲間が傘を拾って来てくれた。その後傘と台座とをしっかりと縫い付けて今も大事に部屋の壁に掛けてある。

(田井光枝)



◆楽屋がないので、境内の適当なところで化粧をする団員達

奉納されていた劇はこの地方の劇で晋劇と呼ばれ、お寺の境内には午前中から奉納される晋劇を楽しみにした人たちが集まっており、線香の煙も力強くあがっています。劇はいきなり始まり、大人たちは板切れやレンガに腰をおろし熱心に見ています。驚いたことに10歳前後の子供達が、背丈いっぱい伸び上がり顎を舞台に乗せるようにして幾つもの劇を真剣に飽きもせず見えています。背丈が足りない子はレンガを3個ほど積んで踏み台にし舞台にかぶりついています。未来の役者はこのようにして生まれるのかもしれませんが。

この奉納劇は、お金持ちのスポンサーがお寺に少なからぬ金額を寄進し、劇団には別に出演料を払って上演してもらいます。2時間の演目は6000円で、半額の3000元だと1時間の上演になります。スポンサーが多い日は朝から夜までも演じられ、少ない日は劇もポツリポツリと奉納されますので、この10日間でのどの位見られるかは、スポンサーの数と劇団への出演料の額次第です。

私達が見た晋劇団は「小鳴琴晋劇団」といい、若手俳優を大勢擁し、見応えのある演目を次々と上演していました。「梅花賞」をとった女優の楊紅麗団長をはじめ

学校を卒業しても、すぐに会社に就職できるという希望が少ないケニアの学生たち。ケニア国内の最高学府ナイロビ大学を出たとしてもそれは同じである。ナイロビの目抜き通りに張り出されている仕事の情報には、常に人だかりが出来ていて、通行の妨げになっていた。学校を卒業する学生が圧倒的に求人数を上回っている現状がある。しかし、なによりも重要なのが「コネ」である。コネでほとんどが決まっているような社会。

それと同時に重要なのが、「アントレプレナーシップ」。つまり、「自分で起業する」のである。私がケニアを去ってから早10年。「コネ」が中心の就職から、今、ケニアでは自分でビジネスをする「ビジネスマン」の増加が顕著だ。ここ数年ケニアの経済成長は、そんな成長著しい起業する若者の成長で成り立っ

ている。彼らは、「ミドルクラス(中間層)」と呼ばれていて、ケニア経済成長の中心となっている。私がケニアにいた頃、「私の夢は、自分を変えること。家族を変えること。ケニアを変えること。世界を変えること。あなたの夢は?」とキラキラした目で私に聞いてき女子大学生がいた。

彼女の名前はタビタ。彼女との出会いは少し面白かった。金曜日の夜、ケニアにあるバーは、「ファミリーデー」と言って、家族連れが多くなる。ケニアでいうバーとは、日本の焼肉屋さんとビアガーデンとディスコが一緒になったようなレストランだ。私は金曜日の夜に仕事の後そこに行くのを楽しみにしていた。

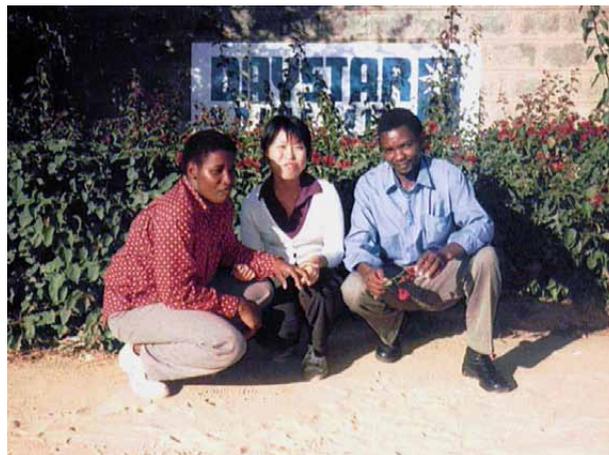
そこで毎週のように偶然出会う長身でおしゃべりが上手で知的な男の人がいた。名前は、リチャードと言った。しかし彼、お酒が弱く、いつも最後には泥酔してしまうのだ。特にケニアの政治の話題に明るく、また牧師を目指していたこともあって宗教的知己に富んでいて、彼と話すのを楽しみにしていた。しかしいつも酔ってしまい、何度か家まで送って行ったこともあった。

その家にいたのが、タビタだった。彼女は、彼がお付き合いしている人だったのだ。酔いつぶれて帰ってくる

彼をいやな顔もせず、いつも感謝して迎えてくれた。そんなことを繰り返すうち、彼女は「私の大学を見に来ない?」と誘ってくれた。そして一緒に訪ねたのが、DAY STAR UNIVERSITY(デイスター大学)だ。彼女は大学1年生だった。

ナイロビから、車で1時間半、マチャコスという町にあるアメリカの資本の私立の大学だ。大きなキャンパス

を歩くと、日本の大学のようだが、学生の様子が随分違う。みんな忙しそうに本を持って移動している。図書館に行くとも満員だ。座る席がない。パソコンの部屋も、コピー機にも行列が出来ていた。彼女が言うには、成績が悪いと落第してしまい、アメリカ留学の夢もなくなってしまったということだった。彼女はアメリカから奨学金を貰っていて、学費も生活費



デイスター大学前で(マチャコス)
2003年2月左から、タピタ 竹田 リチャード

も、将来の留学費用も保証されていた。彼女はケニアの中でも成績が優秀で、数少ない大学に選ばれた学生だった。前途洋々な彼女。彼女の希望にあふれた当時の様子とのケニアの経済成長が重なってみえる。

今までは、才能があっても機会がなかった人達の活躍も目立ってきている。外国人でケニアに投資してビジネスをしようとする人たちも沢山いる。ルワンダでは、カガメ大統領の下、すでに国家戦略として「ダイアスポラ」と呼ばれる先進国で教育を受け、仕事をしてきた人たちの帰国・起業を支援する動きもある。先進国の仕事や地位を捨てて、自国の経済発展に尽くすことが、自分の発展に繋がるという道筋が描けたとき、ルワンダのような施策がケニアでも進んでいこう。いや、私はもう始まっているように感じている。

確かにここ数年、ケニアに帰国する在日のケニア人も増えてきている。アフリカの経済成長の裏では、大望を抱き、人生を切り開こうとする無数の人のエネルギーを感じずにはいられない。タビタが、私に「私の夢は自分と家族と国と世界を変えること。あなたの夢は?」と聞いてから10年。今、ケニアの経済発展は待たなした。

スリランカ濃厚ヨーグルト

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

今回は水牛のミルクから作る濃厚なヨーグルトの話しましょう。日本では水牛のミルクといえばモッツレチーズが頭に浮かぶと思います。僕なんかはトマトの赤色と白いモッツレチーズの配色、よく冷えたワインまで浮かんできます。

スリランカで作られているヨーグルトは英語ではカード、シンハラ語ではミーキリと呼ばれ、スリランカの伝統的なデザートです。ミーキリは濃厚な上にクリーミー、水牛のミルクの味というか匂いまでが強烈に残り、更に酸味の強い素朴なヨーグルトです。スリランカの人達はミーキリの上に椰子の花蜜を煮詰めて作られるキトゥルハニーをたっぷりかけて食べます。キトゥルハニーは蜂蜜ではありませんがハニー又はパニとも呼びます。キトゥルハニーをさらに煮詰めるとハクルと呼ばれる黒糖に似た食材になります。

ミーキリの主な産地はスリランカ南部の穀倉地帯です。この地帯では現在でも田を耕すのに多くの水牛が飼育されています。田起こしを行うシーズン以外は荷役とミーキリの原料作りが水牛の主な仕事のようにです。そのためにミーキリの原料になる水牛のミルクも豊富です。

牛乳に比べてビタミン、鉄分、乳脂肪が豊富なので牛乳のヨーグルトよりも濃厚になるのだそうです。作り方は牛乳のヨーグルトと同じく水牛のミルクに菌を加えて発酵させるだけです。違うのは素焼きの壺や少し深みのある素焼きの平鉢を容器に使う事でしょう。素焼きの容器の利点は、多孔質なので気化熱で冷やされる事と、水分がほどよく抜けて濃縮される事のようにです。また、素焼きの容器は使用される前に燻蒸して消毒します。燻蒸される時の香りがミーキリに残っているのも美味しく感じられます。ウISKキーの樽の燻蒸香と同じですね。

僕のミーキリ初体験は、いつもの事ながら運転手のウダヤ君と南部のプロジェク予定地へ視察に行った時でした。南部のマータラという町に近づく、道路の両側にある商店や屋台に山積みされた、新聞紙の小片で蓋をされた素焼きの壺や、軒先に何段も重ねて紐で縛って吊るされている平鉢が目につくようになりました。ウダヤ君に聞くとヨーグルトだというではありませんか。

さっそく食べてみようと思ったのですが、僕の頭の中にある日本の物差しで考えると、乳製品は冷蔵庫の中に保存されている物で、スリランカのように暑い国では常温で保存できる訳がないという思いがわいてきました。容器にしてもヨーグルトが入っているとは思えません。ヨーグルトは聞き違いだと思い再度聞いてみると、やはりヨーグルトと言っています。

スリランカの人達が食べているのだから、僕が食べられない訳がないと思い試しに小さな壺に入ったミーキリを

買ってみました。買った時に貰った平たい棒アイスのようなもので口に入れてみました。感触は固めのプリンか、溶けかかったアイスクリームでしょうか。酸味が強くてなかなか強烈な印象の味です。その時には水牛のミルクのヨーグルトなんて事は全く知りません。また、ウダヤ君もあえて教えてくれなかったようです。きっと僕の反応を楽しみにしていたのでしょう。さすがに僕のスリランカ学のお師匠さんです。

僕が何口か食べてから、スリランカの伝統的な製法で作ったミーキリという水牛のミルクから作ったヨーグルトだと教えてくれました。ウダヤ君に言わせるとそのまま食べた方が美味しいのだが、最近ではスリランカの人達も砂糖をかけたり、キトゥルハニーをかけたりして食べるようになったのだそうです。近所の商店で砂糖を買って、かけて食べてみるとだいぶ食べやすくなりました。なんとか食べ終わって記念に素焼きの壺を持って帰ろうとすると、壺はその場で叩き割って土に戻すのが作法だそうです。エコですね。

冷やして食べたらもっと美味しいのでは、とウダヤ君に聞いてみるとコロomboのスーパーマーケットでも売っているから試してみたらどうだと言われました。それまでは気が付きませんでした。後日スーパーマーケットに行ってみると、牛乳ヨーグルトと並んでプラスチックケース入りのミーキリがあるじゃありませんか。購入して食べてみましたが、冷やすと、独特の風味が薄れて牛乳ヨーグルトとあまり変わり映えしません。他の店でも素焼きの容器入りのミーキリが冷やされて売られていましたが、美味しくありませんでした。それからは南部に行った帰りには必ずミーキリを買って帰るようになりました。僕は常温のミーキリにちょっとだけキトゥルハニーをかけて食べるのが好きになりました。やはり現地の食べ物現地の食べ方が一番美味しいですね。

今年も9月8日(土)～9日(日)に代々木公園でスリランカフェスティバルが開催されます。素焼きの容器に入ったミーキリはありませんが、キトゥルハニーとハクルは入手できます。最近流通技術が向上したので、もしかするとプラスチック容器入りのミーキリがあるかもしれませんよ。スリランカ料理店や民芸品店、食料品店、アーユルベータなどスリランカを肌で感じる事が出来る店が勢ぞろいします。お酒の好きな方にはスリランカのビールやアラックという地酒の飲める店もありますので、是非ともいらして下さい。

2012年スリランカフェスティバル

9月8～9日 両日 10時～17時

於：代々木公園イベント広場

千代田線・明治神宮前/JR 山手線・原宿下車徒歩5分

最近、「アタッチメント行動」という言葉を覚えた。養育者(主に母親)に対して、乳児が示す愛着行動のことで、他の人に対してよりも母親に対して、子どもはよく笑い、声を出し、泣き止むなどの行動を取る。母親がトイレなどでちょっと席を立つときに、小さい子を預かることがあるが、言葉を話せない子どもから発せられる「お前じゃねーよ」というメッセージはハンパでない。こちらも泣かれて、嫌がられて、「はいはい、分かっていますよー」と思っているが、母親が戻ってくる数分間、耐えるしかない。

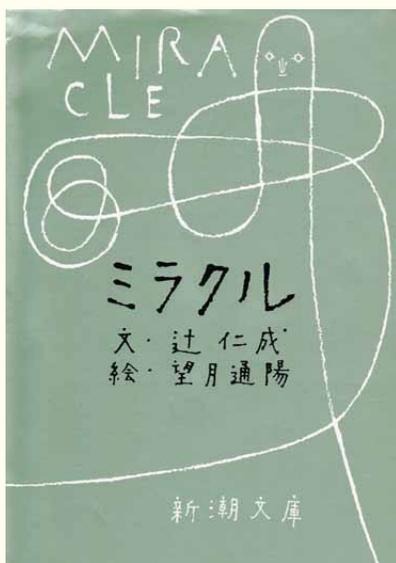
面白いもので、生後数ヶ月の赤ちゃんは、意外におとなしく待っている。「あれ?おかしいなー」という微妙な空気を感じるけれども。そう思うと、私を嫌がるこの子は、母親と他人を区別するという順調な発達段階にあり、さらに、しっかり愛着できた子は、その信頼を基本にして、外へと向かっていくわけで、人間ってすごい。

この物語の主人公のアルくんは、不幸にして生まれるときに母親を失っている。だから、十分な愛着行動ができなかったのだろう、母親をずっと探し続けてい

る。そのため、大人には理解不能と思われる行動を取ること。母親という生き物を知らないアルは、「母親とは許してくれる人」「人間はずっとママに許されて生きていく」と仮定して、母親探しを続ける。けれど、誰も自分の母親だと言ってくれる人はいないのだ。

物語を読み進めていくうちに、この物語の「ママ」とは、神のことではないかと思えてきた。人は神を求めるけれども、「ハイ、私が神です」とはっきり明言してくれる人はいない(いたしたら、ちょっと疑ったほうがいい)。物語はラストで、タイトルどおり「ミラクル」が起きるのだが、私たち大人も、はっきり分からないけれど、なんとなく大きな力を感じて救われることが、あるのではないだろうか。

ちなみに「現実に振り回されている」と、「ミラクル」は見えないぞうだ。大人になるというのは現実を知ることだから、大人になれば何も見えなくなって当然。だからこそ、「ミラクル」とまではいかない日々のささやかなことに、感謝して生活していけたらいい(それさえも難しいときはあるけれど)。(真中智子)



‘わんりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしくお願いします。尚、新年度の会費の納入は、3月一杯をお願いします。また、新入会を歓迎します。

年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

‘わんりい’の活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

入会されると

- ①年10回おたよりをお送りします。
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

- ◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をpdfファイルでお送りします。こちらは無料です。
- ◆町田国際交流センターで、ご自由に取ることができます

ほうほうのていといった思いで寺から逃げ出して来た私は、心の動揺を静めながら、もう何往復したのか思い出せない塔公の道を歩いていると、道端でこぢんまりと屋台を出している串焼き屋が目に入った。そういえばソロソロお腹がすく時刻であった事を思い出し、そっと焼き台の前のベンチに腰かけると、チベット服姿の小柄な若女将が感じの良い笑顔を見せて私を迎えてくれた。

いつものように大好物の水牛肉の串焼きを指さして目の前で焼いて貰ったそれは、これまで各地で食べてきた串焼きの中でも一番美味しいと思える味だ。この四川省という土地の人の好みだと思われる味付けは、得てして日本人の私には塩辛すぎる事が多かったのだが、この若い女主人の焼いてくれた串焼きは塩加減も味付けも程よく、肉が新鮮なのか柔らかくてとても美味しかった。

今朝、あそこで買ってきたのかな?・・・思わず、朝の塔公の町を散歩して見かけていた肉屋の様子を思い浮かべた。正確に言えばそれは店ではなく、その日の朝つぶして皮を剥ぎ、お腹を捌いただけといった感じの大きな肉の塊を、道路脇の屋根の軒先から吊るして、その場でお客の必要に応じ吊るした肉塊から肉を切り分けて売っている様子に、きっと冷蔵庫など持たない人々がその日に使う分の肉だけを、こうして買っているのではないだろうか興味深く眺めていたのだった。

数本の串焼きを食べ終わると席を立った私は、この後何をするかの当ても無く、ブラブラと塔公の町を散歩した。パスポートに残されたビサの期限は既に残り1週間を切っている。もうこの小さな町でこれ以上やる事も思いつかなかった。

人気の無い町はずれの丘に登り、既に深い愛着を感じている町の様子を眺めながら、明日の朝この町を離れる気持ちを固めた。別れを惜しむような気持ちで青空を背景に町の頭上を横切るタルチョや、祈祷旗をはためかせた神山を従える町の風景を目に焼き付けると、元来た道を折り返し再び先ほど後にした塔公寺の方向に向かった。今日を最後の日にすると決めたことで、最後に改めてゆっくりと町の端から端までを歩きたいと思っての事だ。

すると先ほど私が串焼きを食べた屋台の前を通り

過ぎた時、ハーン!と手を振りながら、突然小さな少女が飛び出して来ると「何処にいくの?」と私と共に歩き出した。

「え?」

歳の頃は7、8歳位に見える可愛らしい少女の顔には見覚えが無かった。塔公にやってきてからの事を忙しく頭の中で思い巡らせてみても、この少女と出会った記憶は思い出せない。何かの客引き?それとも物売り?インド辺りに行けばしょっちゅう出会う事となる、まだ幼い子供の商売人達を一瞬思い浮かべてしまったが、この塔公はそこまで観光擦れした土地ではないだろう。

キツネにつままれたような気持ちだったが、そんな事はどうでも良かった。子供と遊ぶのは大好きだし、一人で過ごしていた孤独な時間を共に過ごしてくれる仲間が現れたのは大歓迎だ。

「ねえ、何処にいくの?」

私の後をついて歩きながら、少女は再び訪ねた。

「あっちの方よ」

元々、どこに行くかの当てなどなかった。適当に前方を指さすと、「一緒に行こうよ」と少女の手を取り、二人でならんで仲良く歩き出した。

午前中を過ごした塔公寺を脇に回ると、何やら小さな門があり、中からカンカンカンカン・・・という不思議な音が響いていた。土地の少女と一緒にすることで気が大きくなっている私は興味を惹かれるままにその扉の中に入り込むと、そこでは大勢の少年工達が宗教的な模様やお経の言葉を、薄い金属の板に打ち込む作業をしているのだった。ああ、ここでも!・・・

その日の朝、私は朝の散歩で、塔公の町はずれにある巨大なマニ塚を見に行っていた。マニ塚とは、このチベット高原一帯の何処にいても目にする、マニ石と呼ばれるチベット仏教の経典が刻み込まれた石版が、積み重ねられ塚になっているものだ。

成都の宿で知り合った日本人が持っていたガイドブックに、ごく簡単にふれられていた塔公の見どころとして、そのマニ塚が紹介されていた。初日にそれを見に行こうと宿を出たのが全く違う方向に突き進んでしまい、それきりになっていたのを、この日の朝散歩で訪れてみたのだ。いったい何枚のマニ石が重ねられ

ているのか想像もつかない巨大なマニ塚が、いつから誰の手によってここに存在しているのか興味深かったが、それよりも強く私の興味を引いていたのは、マニ塚の脇の小道を挟んだ向かい側の敷地からコツコツコツ・・・と響いてくる不思議な音だった。

周りをシートで囲われており、中で何が行われているのか解らなかったが、人一倍好奇心旺盛な私はよそ者である立場も忘れ、シートの間隙の入り口をめくって中に侵入してみると、そこでは工事現場で使われるようなビニールシートで仕切られたテントハウスのそれぞれの個室で、数名の少年石工達が一心にマニ石を刻んでおり、外に響いていた不思議な音はそこから漏れていたのだった。

石工達は畳半畳ほどの石版を前にして、見本の仏教経典を広げ、刻んでいる文章の列を見失わないように経典の上に物差しを当て、それを少づつずらしながら、同じ文章を石版に刻んでいた。手慣れた様子で器用にノミと金づちを使い、まるで手で描いているようなスピードで、どんどん美しいお経の文字が石版に刻み込まれている。

その鮮やかな職人技には思わず目を奪われたが、その場にいる石工の殆どがまだ10代と見られる少年工で、服装などはいかにも今時の少年といったいでたちだ。中にはガムを噛んだり、ラジカセで流行りの音楽をかけながら作業している者もいて、マニ石といえば高僧が自身の仏教的な想いを一文字一文字魂を込め、厳粛な雰囲気の中で刻まれているようなイメージを漠然と抱いていた私としては、このあまりにドライで職業的な雰囲気に少なからず拍子抜けするような思いも感じたのだった。

少年工達の作業場となっているテントハウスの奥には布団や漫画、食料などが置かれているのをみると、この場所は彼らの住居兼作業場であるらしい。少年達はここに暮らしながら、朝から夜までこうして一日中、石版にお経の文字を刻み込んでいるのだろう。石に刻まれた文字はどれも美しいが製作者によって筆跡が違い、それぞれに個性があるのが面白かった。

ここでこうして制作されたマニ石は、更にあの巨大なマニ塚の上に積まれるのだろうか？ それとも余所の土地に運ばれるのか？ どう見ても仏教的な雰囲気とは程遠い感じで少年達に作られたマニ石は、どこかに安置される前に僧侶が経を唱えて魂を込めたりするのだろうか？

私はこの年頃の少年に出会った時のいつもの癖で、

亜丁の少年の事を思った。同じ年頃の少年がこうして狭い世界の中で、単調な毎日を送りながら暮らしている事を思えば、やはり外の世界に飛び出して自由を謳歌しているように思える彼は、本当に恵まれた幸せ者なんだろう。

ここで働いている少年達はこれからどんな人生を暮らし、どんな大人になっていくのだろうか。日本にいれば他者の人生に思いを馳せる事など殆ど無いが、この土地にいると誰かに出会う度にそれを思わずにはいられなかった。

・・・ちょうどこの日の朝、そんな光景を眺めてきた同じ日の午後、またしても同じように仏教的な装飾品を加工する少年工の作業場に迷いこんでしまったのだ。朝のマニ石制作現場といい、塔公寺の僧の個室といい、日ごろ何も考えずに有難く拝んでいたお寺の舞台裏が垣間見られる貴重な一日だ。

少年工達は手慣れた仕草で金属板に型を当て、金づちで型の模様を打ち込みながら素早く金属板の装飾を完成させていく。完成したものはきっと寺院の柱や梁にはられて寺の飾りに使われたりするのだろう。興味をひかれて作業台の前まで行き、じっと作業を見ている私達に少年工が笑顔を見せた。

「何処から来たの？」

「日本から」

そう答えながら、年若い少年がこうして働いているというのに、毎日気の向くままブラブラと遊んでいる自分が少し恥ずかしく思えた。これらの作業は興味深くもっと見ていたかった気もしたが、こんな光景は特に珍しくもないのであろう少女に「もう行こうよ」と手を引かれた事もあり、彼らの仕事の邪魔をしているのに気がひけた事もあってその場を離れ、再び少女と歩きだした。

特に行く当てもない私たちは、塔公寺の周囲を囲う塀に設えられたマニ車を二人で走って回しながら競争して歩き、グルッと回って元の寺の正面に戻った時には、既に先ほど出会ったばかりと思えないくらい、すっかり仲良しになっていた。

その後は、肌寒くなる夕暮れ時に備えて私の宿の部屋に上着を取りに戻り、しばらくそこで一緒に過ごしたり、町の街頭映画館を冷やかしたりした。

街頭映画館とは、私が勝手に命名した名前だが、成都にいた時からあちこちの町でよく見かけていた。入り口から中にはいると真っ暗な部屋の正面に大型のテ

レビが置かれ、映画のビデオが流されているのを、中に置かれたベンチに腰掛け見る事ができるようになっている店(?)だ。恐らく家にテレビやビデオを持たない人間が遊びにくるのでは?と思われ、こんな海外の下町文化には非常に興味を惹かれてしまう私なのだが、何しろ料金やシステムがどうなっているのか解らずに、地元の間がひしめき合っている暗い部屋の中に入るのがためらわれ、これまで足を踏み入れた事がなかった。

それが思いがけずこの日初めて、少女に手を引かれるままに侵入することができたのはちょっと嬉しく、ドキドキしながら二人で並んでベンチに腰掛け、しばらくテレビの画面に流れる映画を眺めていたのだが、特に誰かが料金を徴収しにくる訳でもなく、どうすればいいのか考えているうちに再び少女に手を引かれて外に出てしまったので、結局この手の店の謎は解明する事が出来ずじまいだった。

道端の雑貨屋で駄菓子を買って再び元の串焼き屋に戻ると、少女の母親である女主人は心配していたらしく、何処に行ってきたかと少女を諷めている様子だったが、娘からこの人に買ってもらったと差し出された駄菓子を見ると、私に笑顔でお礼を言った。

結局、彼女が私に声をかけてきたのは、先ほど母親の店で串焼きを食べた人間の顔を覚えていたという以外の理由はなかったらしい。外人観光客も数多く訪れるこの土地で育った少女は他国の旅行者に接する事にも慣れてきているのだろう。

その後はそのまま串焼き屋台のベンチに腰掛け、少女の母親が焼いてくれる美味しい串焼きを食べながら、そこで談笑して過ごした。少女には小さな弟がいて、やっと歩けるようになったばかりといった年頃のその子は、ずいぶんやんちゃな少年だ。テレビで見る中国剣劇を真似て、何やらセリフを呟きながら剣に見立てた串焼きの串で、一人で勇ましく敵と立回るのに夢中になっている様子を見ると、心意気は既に一人前の男になりきっている感じだ。たまたまその場を通りかかった西洋人観光客の前に走り出て、焼き串を観光客に向け相手を睨みながら、決めのポーズをとる姿には、この歳にして男気とユーモアが溢れていて私はいっぺんに彼のファンになってしまった。

いきなり小さな少年に道を塞がれ、焼き串をつきつけられて困った西洋人は大げさに降参の仕草をしてみせ、何とか道を通行することを許されていたが、少年剣士はその後も一人で敵との戦いを繰り広げていた。あまりの可愛さに手を伸ばして抱き上げようとして

も、私の手を振り払ってそれを拒み、「俺に構うな!」といった雰囲気だ。

まだ赤ちゃんと呼んでもいいほどの幼い年齢にも関わらず、人に抱き上げられる事や、危険から守ろうと大人の保護の手が伸びることを好まない、自立心とプライドが高いこの少年には、既に誇り高き男の片鱗が感じられ、思わず理塘の草原のテントで出会った遊牧民家族の少年の面影と重なった。

やはりチベットの男たちは、生まれながらにしてみんな誇り高い戦士なのだ。ふやけた昨今の日本男子たちに爪の垢でも飲ませてやりたいものだ。

そんなことをして過ごしている合間にも串焼き屋台には次々とお客が現れ、少女は健気に母の手伝いをしようとするが、母親には逆に邪魔なようで、遊びじゃないんだからお前は手を出さなと制していたのを、聞かない娘が無理に手を伸ばし、勢い余って焼き台に倒れ掛かかって、数本の串焼きが地面に散らばってしまった。

お客が焼けるのを待っていた商品が駄目になってしまい、仕事の邪魔をされて怒った母親が娘を叩いて叱りつけ、少女がその場で泣き出してしまうと、それまで一人で遊んでいた少年剣士は泣いている姉の元にやってきて慰めるそぶりを見せ、俺がカタキを取ってやるぞといった仕草で母親を殴る真似をして見た。握りこぶしに息を吹きかけ、母に向かっておどけながら怒った表情まで作ってみせるその仕草に、みんなが笑ってその場はすぐに収まったのだが、私は少年の頭の良さにビックリだ。

きっとそんな仕草もテレビでみた映画の真似なのだろうが、まだ3歳にも満たない年齢だというのに姉を思いやる気持ちや、この機転とユーモアはどうだろう。この子は素晴らしく明晰な頭脳の持ち主なんじゃないだろうか? 将来どんな素晴らしい男性に成長するのか楽しみだ。いつかそんな彼の成長ぶりを見届けに、再びこの塔公に訪れたい。

先ほどは怒っていた母親も娘を抱き寄せてもう悪戯は駄目よと諭すと、今泣いたカラスがもう笑った少女は、直ぐにすっかり機嫌を直して大人しく私の隣に座った。

そんな彼女の肩を抱きながら徐々に暮れていく塔公の街並みの中、これまで孤独に過ごしてきたこの町で、最後の日に初めて感じられた町の人との触れ合いの暖かさに、私は幸せな満足感でいっぱいだった。

(続く)

長年、日中藝術研究会・事務局を担当し、現在大東文化大学で教鞭をとっていらっしゃる三山陵先生からの紹介で、6月鎌倉国宝館で開催の、常盤山文庫名品展の案内を沢山頂きました。‘わんりい’6月号と一緒に送りましたので覚えていらっしゃる方も多いかと思います。

そのパンフレットの表紙に、赤味を帯びたひび入りの、キャラメル色の焼き物が掲載されていて、その玉のような風合いの存在感に魅了されました。しかも、その焼き物の脇には「米色青磁」とあります。えっ、青磁ですか？ 米色ってどういう意味ですか？ 青磁といえば灰青色の焼き物では？ 焼き物についての知識は殆ど無いのですが、不思議な魅力と疑問に取りつかれ、推理小説を読み解いてみたいような気持で、最近は滅多に行かなくなっていた鎌倉に足を運びました。

実は、鎌倉には何度も足を運びながら鎌倉国宝館を訪れたのは初めてでした。

というか、恥ずかしながら存在さえも知りませんでした。鎌倉国宝館は鶴岡八幡宮の大鳥居をくぐって右手に広がる蓮池を越えた奥、地味な目立たない所にひっそりとありました。コンクリート建築の高床式校倉風建築で、鎌倉国宝館の説明によると、外観を奈良の正倉院に模し、内部は鎌倉時代の寺院建築の手法を模しているそうで、平成12年に国の登録有形文化財に登録されているとあります。

鎌倉国宝館についての説明は、ネット検索に譲るとして、常設展示の鎌倉周辺の仏像がなかなか魅力的でした。毎週土曜日は14:00から学芸員の説明もあり、卑近なところで国の重要文化財の指定を受けている仏像群のそれぞれの説明を聞きながら鑑賞できる嬉しい場所を発見した感じです。

さて、件の米色青磁は、特別展示の「常盤山文庫名品展」の方で、此方は「常盤山文庫」の学芸員・佐藤サアラさんが、南宋官窯で焼かれた米色青磁が発見され、日本で保存されているいきさつを、熱をこめて短い時間目いっぱい解説くださるのを聞きながら拝見しました。

いわゆる青磁と同じ釉薬を使いながら、片や米色（稲穂色とも呼ばれるそうです）に焼き上がってしまう不思議。青磁が青磁色に焼き上がるのはいろいろな要因の克服による、なかなか気難しい焼き物で、ひと口に青磁といわれてもその色合いは様々で、その訳を初めて知る事

ができた機会でした。「青磁」ですから、本来青色に焼き上がってこそ青磁として評価されるのですが、官窯だったが故、偶発的に米色に焼き上がった焼き物が殊のほか美しかったので廃棄せず皇帝に献上したところ、当時の皇帝の好みにも合いその後窯の炎の状態を調節して意図的に米色を出したと思われるとのことでした。

青磁でありながら稲穂色に焼き上がる不思議は、既に解明されているようですが、それにしても灰青色の焼き上がりを期待して窯を開き、稲穂色の焼き物を発見した当時の窯人の驚きは如何ばかりだったでしょう。解説を聞きながら、当時の窯人たちの驚きや苦勞、そして窯を開くたびに味わったにちがいない感動を共にしたようでした。

米色青磁器は、現在世界でたった4点しか残されておらず、しかも米色青磁が南宋官窯の名品として広く公になったのには日本の陶磁学者等が関わっており、この4点はすべて日本が保有しているとのこと。時折小雨がぱらつく鎌倉で、目の前の稲穂色の焼き物の奥に繰り広げられたドラマを垣間見たような一日でした。残念ながら、7月1日にこの企画展は終了ですが、きっとまたどこかで展示されることでしょう。米色青磁のロマンを是非感じてみて頂ければと思います。

‘わんりい’に掲載の『媛媛讲故事』が本になりました。

中国文化に影響を与えた物語
「蒼海拾貝」一粒書房刊

‘わんりい’連載中の、中国に伝わる壮大な天地創世の神話から八仙人の奇想天外な話まで26話の物語が、‘中国文化に影響を与えた物語「蒼海拾貝」’として、可愛い本に纏められ、今年五月出版されました。

改めて読み直してみますと、豊かな想像力を無辺の世界へ羽ばたかせた中国伝承の物語はどれもこれも大陸的な面白さで圧倒されるようです。一冊を是非お手元に置かれませんか。購入のご希望は‘わんりい’事務局でもお受けします。

●わんりい ☎/FAX :
042(734)5100
定価：1,000円



◆わんりいの催し

〈中国・山西省の家庭料理には、マントウと花巻が合う!〉

中国の食生活は、米を主食とする南方と小麦を主食とする北方に大きく二つに分けられます。北方では、小麦は粉に挽いて、餃子や麺などにする他、餅・饅頭・花巻など様々な種類の主食となります。今回は、小麦粉を使う代表的な主食・饅頭と花巻の作り方とこれらに合う中国山西省の日常的な家庭料理をご一緒に作って、中国家庭の味を楽しみましょう。

🍅 2012年8月5日(日) 10:00 ~ 14:00

🍅 場所：鶴川市民センター・第二会議室

〒195-0062 東京都町田市大蔵町1981-4
小田急線鶴川駅から野津田車庫行きバスで「鶴川市民センター入口」下車徒歩4分

🍌 講師：何媛媛(国土舘大学中国語講師)

🍌 会費：1500円(会場使用料・材料費など)

🍌 定員：15名(定員になり次第締め切ります)

🍌 持ち物：エプロン・筆記用具・プラスチック容器

🍅 申込み：わんりい ☎ 042-734-5100

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

🍲 講習予定料理

マントウ ホア ジュアン
🍲 饅頭と花巻



* 饅頭: 餡の入らない蒸しパン風主食(餡入りは包子です)

* 花巻: 小麦粉を捏ねて花のように巻き上げて蒸します

🍲 山西省の美味しい家庭料理・3種

① 紅焼帯魚 ② 蕪菜炒豆腐 ③ 麻婆茄子

◆ サラダ、スープ、夏向き冷たい中華デザート付

◆わんりいの催し

第11回 中国語で読む・漢詩の会

漢詩は音楽です。「漢詩を中国語で聴き、中国語で朗読する」ことを目指します。中国語を勉強されていらっしゃる方も、詩の背景や作者を知って、中国語による詩吟として楽しんで見るのは如何!? 皆様のご参加をお待ちしています。

■ 場所：まちだ中央公民館6F・視聴覚室

町田市原町田6-8-1

JR 横浜線町田駅ルミネ口2分/小田急線南口5分

■ 月日：2012年7月29日(日)

■ 時間：14:00 ~ 15:30(講座は午後です)

■ 講師：植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)

■ 会費：1500円 ■ 定員：20名

* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆ お申込み：☎ 050-1531-8622(わんりい)

E-mail: ukiuki65jpjp@yahoo.co.jp



【植田渥雄先生略歴】

1937年、岡山市生まれ。東京大学文学部卒業

・元桜美林大学教授

・元NHK ラジオ中国語講座担当講師

・現桜美林大学孔子学院講師

・現桜美林大学名誉教授

第8回弦の縁・姜小青フレンドリーコンサート
古箏で奏でる中国、沖縄そして日本の心

古箏の名手・姜小青さんの華やかな古箏の音色と沖縄の心を歌う大島保克さんの唄と三線

▶ 2012年8月31日(金)

▶ 開演：19:00(開場：18:30)

▶ めぐろパーシモン小ホール
(目黒区八雲1-1-1)

▶ 姜小青、西本梨江(ピアノ)、
大島保克(唄・三線)

▶ 料金：¥4,000(当日：¥4,500)
(全席自由席)

◆ 主催：(姜小青フレンドリーコンサート実行委員会)

◆ 問合せ&申込み：080-1304-7347(村山)



【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、原則として、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と関係者の皆さんの原稿でまとめられています。中国で体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなどを気楽にお寄せ下さい。*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたりすることもあります。

* 'わんりい' に掲載の記事などについても簡単にご感想をお寄せいただければ有難く存じます。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

日中国交正常化40周年記念公演

張紹成が贈る
～中国文化艺术の響き・2題～

① 京劇ワークショップと中国伝統芸術

2012年7月28日(土)開演 14:30 (開場 14:00)

会場…▶ムーブ町屋◀

- ・地下鉄/千代田線・町屋駅0番出口1分
- ・京成線・町屋駅徒歩1分
- ①京劇の見方楽しみ方 ②京劇の舞と立ち回り
- ③変面 ④雑技 ⑤中国音楽
- 一般：2,500円

② 京劇公演「西遊記」

2012年9月14日(金)開演 19:00 (開場 18:30)

会場…▶サンパール荒川◀

東京メトロ/日比谷線・三ノ輪駅下車12分
千代田線・町屋駅下車→都電荒川線・荒川区役所下車2分

〈演目〉

- ①三岔口(さんちやこう)②拾玉鐮(しゅうぎよくしよく)
- ③西遊記より「鬧天宮(とうてんきゅう)」

S席:5,000円/A席:4,500円/自由席:4,000円

●両公演同時購入は、合計金額から500円割引

主催：(株)CSC企画 ☎048-477-6961

第8回弦の縁・姜小青フレンドリーコンサート

曹雪晶・二胡コンサート

中国屈指の民族楽器オーケストラ・上海民族楽団の二胡ソリストとして活躍していた曹雪晶二胡リサイタル

演奏予定曲目：

万馬奔騰 / 十面埋伏 / 粧台秋想 / ユーモレスク / 精霊の踊り / タイスの瞑想曲、他

- ▶ 2012年8月26日(日)
- ▶ 開演：14:00 (開場：13:30)
- ▶ 会場：JT アートホールアフィニス
 - ・地下鉄銀座線「虎ノ門」3番出口
 - ・地下鉄日比谷線 / 千代田線 / 丸ノ内線「霞ヶ関」A13番出口徒歩7分
- ▶ 料金：4,000 (全席自由席)
- ▶ 問合せ&申込み:080-3546-8656(オフィス・和弦)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

[6月の定例会と7月号`わりい'発送日]

- ◆定例会：7月11日(月) 13:30～ (田井宅)
- ◆おたより8月号の発行はありません。

日中国交正常化40周年記念公演

驚異のコラボ
森茉莉 崔宗宝・崔宗順 兄弟

(ソプラノ) (バリトン) (バス)

～世界名曲の贅沢饗宴～

落葉松 / 『坂の上の雲』 テーマ曲 / 蚤の歌 / ヴォルガの舟歌 (ロシア民謡) / オペラ『後宮からの逃走』 から「そうさ、勝どきをあげてやる」 / オペラ『椿姫』 から「花から花へ」、他

2012年9月9日(日) 開演 14:00 (開場 13:00)

会場…▶サントリーホール◀

〒107-8403 東京 都港区赤坂1-13-1 ☎：03-3505-1001

[南北線]六本木一丁目駅(3番出口)徒歩約5分
[銀座線・南北線]溜池山王駅(13番出口)徒歩7～10分

SS：6,000円/S：5,000円/A：4,000円 B：3,000円

収益の一部を崔宗宝東日本大震災支援奨学基金寄付させていただきます。

●申込み&問合せ：崔宗宝音楽事務所
☎046-240-0836

町田国際交流センター/協力部会が主催の催し



蘭のコサージュ作りと
揚琴演奏を楽しむ会

2012年8月28日(土)

◆第1部 蘭の花のコサージュを手作りしよう！
15:00～16:30

場所：国際交流センター・講習室(町田市民フォーラム4F)
JR町田駅ターミナル口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩7分

募集30名(原則として外国の方)

参加費：300円(材料費)

◆第2部 中国の民族楽器・揚琴ってどんな楽器？
13:30～14:30

場所：町田中央図書館6Fホール

JR町田駅ターミナル口徒歩2分/小田急線町田駅南口徒歩7分

募集100名(先着)

*どなたでも参加できます。又、2部だけの参加可です。
参加費：無料
揚琴演奏：林敏(リンミン)

▶演奏予定曲：

♪シルクロード ♪川江韻 ♪龍船 ♪草原情歌 ♪美しい新疆 ♪世界の民謡メドレー ♪さくら変奏曲・他

▶問合せ ☎042-722-4260 町田国際交流センター

▶申込み方法：住所・お名前・電話番号及び参加希望人数を町田国際交流センターへファックスする。

FAX番号：042-722-5330

◆`わりい'8月号はお休みです。お元気で良い夏を過ごされますようお祈りしています。